

ウィニフレッド・ワトソン作
最所篤子訳

ミス・ペティグールの素敵な一日

Miss Pettigrew Lives for a Day, by Winifred Watson, Translated by Atsuko Saisho

第三章午前一一時三五分

午後一二時五二分

ミス・ラフォースが新しいお客から身をほどいたので、ようやくミス・ペティグールはその男をちゃんと見ることができました。優雅で、しなやかで、みごとに均整のとれた体。浅黒く、印象的な目鼻立ち。こんなに容貌と肌の色がじっくりと合っている男性はめったにいません。深い、青みがかった紫の瞳は見る者を刺すように輝いています。形のいい、薄情そうな唇。その上に生やした小さな黒い口ひげのおかげで、洗練さとかすかな不良っぽさが漂い、独特の魅力が加わっています。表情にはなんとなく肉食獣を思わせるものがありました。この男には魅力的で、相手をつらえて離さない何かがあるのです。



島田圭子画

ミス・ペティグルーは奇妙な、酔っ払ったような感じで椅子からゆっくりと立ち上がりました。なるほどミス・ラフォースが参ってしまはずです。一目で合点がゆきました。映画にはこれと似たような男たちがどっさり出てきます。若くて、魅力的で、女がどうしようもなくひきつけられてしまう男。圧倒的な自信にあふれ、気まぐれな興味が消えれば、冷淡そのものになってしまう男。こつした男に目をつけられたおかげであやうく破滅に陥るヒロインたちを何度、目撃したことでしょう。でも、ここにはミス・ラフォースを救いにやってくるヒーローはいないのでした。

(面白いわねえ)とミス・ペティグルーはぼうつとしながら考えました。(こつという男たちは本に出てくるし、映画でも観るけど、ふだんの生活で会うなんて考えたこともなかったわ。でも、やっぱりこつという男ってちゃんとこの世にいるのねえ)

ミス・ラフォースは彼から離れて立っていました。クリームを舐めたあとの猫みみたいな顔をしています。かすかに不安と緊張の色が浮かんでいます。ニックがミス・ペティグルーに気がつきました。とたんに顔をしかめ、ミス・ラフォースに怒って問いたですようなまなざしを向けます。

「あ、こちらね」とミス・ラフォースは言いました。「こちらはお友達の……お友達の……アリスよ」

そしてどうにか自分を立て直すと、もうすこしきちんと紹介をしておきました。

「アリス、こちらニック。ニック、お友達のアリス」

「はじめまして」ミス・ペティグルーは礼儀正しく言いました。

「ああ」ニックはぶっきらぼうに言いました。

ニックが自分を上から下までちらりと見た目つきに、ミス・ペティグルーは自分の年齢や、みすぼらしい身なりや、不細工な身体つきや、薄くなった髪や、青ざめた顔色を思い出させられ、恥ずかしさに顔が真っ赤になりました。でも理性は「なんて嫌な男」と思いながら、心はどうしても惹かれてしまうのです。

その魅力は単にハンサムな外見だけではありませんでした。外見はおまけでしかありません。もちろん、得なおまけではありませんが、絶対必要なものではないのです。それはニックという人間がもつ何かでした。入ってきた瞬間、ニックはその部屋の空気を支配するのです。その場のすべての女性たちが、彼の目をとらえようと争いはじめます。たぶん、どんな女性の中にもある、女の部分に働きかけるオーラのようなものかもしれません。ミス・ペティグルーもそれを感じました。そしてそれに反応しました。反応しないわけにいかないので。女心は理性をあっさりと裏切りました。ニックがミス・ラフォースにしたようにキスしてくれるなら、ミス・ペティグルーは一〇年、寿命が縮まったって本望だったでしょう。思わず若さや美しさや可愛らしさを持っているミス・ラフォースを憎みそうになったほどでした。もちろんちょっとの間だけですけどね。ミス・ペティグルーはそんなに愚かじゃありません。

ニックにかかわっては駄目。ミス・ペティグルーはちゃんと承知していました。ミス・

ラフォースがさつき話してくれたこともありませんが、彼自身のもつ何かがそう思わせるのです。だからこそニックはそんなにも魅力的なのです。ミス・ペティグルーはまじめ一本やりの退屈さなんかとは違う、悪の香りがきいたえも言われぬ魅力を十分、理解できました。

(まあまあ！)とミス・ペティグルーは思いました。(こつこつ男つて悪い男かもしれないけど、そんなことはどうでもいいんだわ。こんな男にかかったら善良な男なんてでくのぼうですよ。マイケルがもうちよつと善人でなくて、お堅くなかつたら見込みがあるかもしれないけど、こんな人を相手に、並の男が勝てるわけがない。女ならとにかく惹きつけられちゃうもの。無理もないわね、恋愛となると女つて誰でも生まれつき危険な方に引き寄せられるんだから)

ミス・ペティグルーはため息をつきました。これはなかなか手ごわそうです。あんまり興奮したために、自分がいつここを追いつかれるか分からない身であることをすっかり忘れていました。いまやミス・ラフォースと一心同体の気分です。赤ん坊の頃からずつと知っている相手のような気がしてきました。

ミス・ラフォースは立つたまま、二人を不安げに見比べていました。微笑みからはさつきの見事な自信が消えつせ、なんとなくそわそわとした、相手をなだめすかそうとする表情が見て取れます。男を完全に支配したいと切に願いながら、その自信がないときに女性が浮かべるあの顔です。

「ね、こちらに座つて」とミス・ラフォースは機嫌をとるようにニックに言いました。(だめだめ)とミス・ペティグルーは考えました。(そんな態度じゃだめよ。……なんというか、もつと堂々とさりげなくしないと。こつこつタイプは無関心さにぐつとくるんだから。手に入れたと思わせたら、ニックは逃げていつてしまつわ)

そんな下品な考えがわいてきたことにミス・ペティグルーは我ながらぎよつとしました。ニックに恋してしまうわけにはいきません。心の中で彼をけだもの、成り上がり、いかさま師とののしりました。ああ、でも一度でもニックが自分を見て、ミス・ラフォースにしたみたいにキスしてくれたら、ニックの奴隷になつてしまつかも……。

(そんなこと考えるなんて)とミス・ペティグルーは不安になりました。(それもこの年になって。あたくしはほんとに馬鹿なんだわ。ニックにしたら、あたくしなんか古新聞かなんかみたいにやつかいばらいしたがってるの、見えみえじゃないの)

実のところ、ニックはミス・ペティグルーがそこにいるのが面白くないのを隠そうともしませんでした。ミス・ラフォースが誰かと一緒にいる現場を押さえてやるつと、嫉妬をかきたててやってきたものの、まさかミス・ペティグルーとかいう女がいるとは予想もしていなかつたのです。しかもこの間抜けなばあさんはすつかり腰をすえています。ミス・ペティグルーはこつこつしたニックの思いを感じ取りました。すると急にいつものおどおどした気分が押し寄せてきました。

(出て行くべきかしら?)とときどきしてきます。(つまるどころ、あたくしは邪魔者な

んだもの。ミス・ラフォースだって、いらぬおせっかい焼きなんか出て行ってくれたらと思つてははずですよ。ここにいてとは言つたけど、本気で言つたわけじゃないわ。居心地の悪さにのぼせてしまい、ミス・ペティグルーは少し身を震わせはじめました。さつそうとした新しい自信は影も形もなくなつてしまいました。ミス・ペティグルーはやっぱりミス・ペティグルーで、役立たずの保母兼家庭教師でしかないのです。臆病で、間抜けで、途方に暮れて。ミス・ペティグルーは椅子の背をぎこちなく触り、ミス・ラフォースに目を向けました。

するとミス・ラフォースはにっこりと温かい、励ますように微笑んでくれたのでした。そのとたん、ミス・ペティグルーはなにも怖くなくなりました。ニックがあたくしを嫌おうが、それがいいじゃないでしょうか。彼がいくら素敵だつて関係ありません。そうしたければ好きなだけ魅力を振りまけばいいんです。そんなものによるめいたりするのですか。無礼にふるまいたいならご自由に。ちよつと突つついてやつたらニックはうんと無礼になるに違いありません。けれど、侮辱されたつてへのかつぱです。このミス・ペティグルー、ここから一歩だつて動きませんとも。あたくしを追い出せるのはミス・ラフォースだけですことよ。

ミス・ペティグルーはまた椅子に座ると、澄ました顔でゆつたりと腰を落ち着けました。

ニックがにらみつけましたが、ミス・ペティグルーのびくともしない様子に、そろそろとミス・ラフォースのほうに向き直りました。

「君一人だと思つていたのにな」

ミス・ラフォースはニックの憎々しげな声の調子に飛び上がりました。

「でも、明日つて言つたじゃない」おろおろと訴えます。「明日つてはつきり言つたわよ」

「ああ、でも急いで一日早く仕事を終えて、まっすぐ帰つてきたんだ。早く帰れば君が喜ぶと思つて」

「ダーリン。嬉しいに決まつてるじゃないの」とミス・ラフォースは両腕を大きく広げてニックに近づきました。「死ぬほど会いたかつたのよ。もう帰つてこないかと思つたわ」

（まことにまずい口の切り方だわ）とミス・ペティグルーは心配になりました。（これから別れ話をしようつてときの挨拶には聞こえませんかよ）

ニックは満足そうな顔をしました。ミス・ラフォースに、本番の予行演習として、軽くキスをし、物分りのよさそうな顔をしました。彼女がこのばあに無礼な真似をしたくないのしょうがあるまい。だが俺は屁とも思わないぞ。ニックはミス・ラフォースを脇に押しやると、ミス・ペティグルーのまん前に腰を下ろしました。

「名前はなんだつて」とニックはできるだけ相手を馬鹿にしたような声を出しました。

ミス・ペティグルーはさかのぼつて四つ前の勤め先のミセス・ジャッカマンの皮をか

ツクを受けた顔を見ると、ニツクのかんかに怒った顔にすがるようなまなざしを投げます。

「ニツク、ダーリン、お願いだから座ってちょうだい。ね、ちゃんとこっちを見て」
ニツクはあまりに頭にきていたので逆らいませんでした。ミス・ラフォースはニツクの上着を脱がせてやり、ソファに座らせ、自分もその隣に座りました。ニツクはもう一度、ミス・ペティグルーをにらみつけましたが、肩をすくめると邪魔者のことは忘れることにしました。ミス・ラフォースが思ったとおり、ネグリジエはたいへん誘惑的だったのです。

もうミス・ペティグルーはそれほどききませんでした。

(まあね)とミス・ペティグルーは情けなさそうに考えました。(当人たちが気にしないんだから、あたくしが気にすることないんだわ。たぶん、これまであたくしの見が狭かったんでしょよ。この……このきゅ、求愛行動、というのはどうやらいへん心地いものようだし)

ミス・ペティグルーは背筋を伸ばして、そのテクニツクを興味深くながめはじめました。

(ふうん)ミス・ペティグルーは物知りぶって考えました。(フィルとの場合は仕事みたいなものでしかなかったんだわ。楽しい仕事だけど、とにかく毎日の務めでしかないのよ。でも相手がニツクだと、しぐさ一つ、接吻ひとつで自分がこの世でたった一人の女だと思わせてくれるのね。これでは彼を拒むなんて無理な話よ)

ようやくミス・ラフォースとニツクは息つきをするために身体を離しました。ニツクはミス・ペティグルーをつくづくと眺めました。ばばあがニツクにとつて三五歳以上の女性は皆、ばばあなのです。いちやいちやを気にしないっていうなら、年寄りの楽しみをとることもないか。邪魔はしてくれたが、まあ時間もまだ早い。お楽しみはなんといつても夜だ。こんな上等な楽しみは少し先に延ばしたって減るわけじゃない。ニツクは座りなおしました。

「一杯やりたいな」

「あたしもよ」ミス・ラフォースがうなずきました。「お酒の場所、分かるでしょ」

「ああ。何を飲む？」

「そうね」ミス・ラフォースは考えました。「いつものスペシャルカクテルをお願い。あれを飲むと景気がつくの」

「よしてきた。あんたは？」

「あたくし？」とミス・ペティグルー。

「ああ」

「お酒？」

「そう言ってるだろ」

ミス・ペティグルーは「まあ、結構ですわ」とお上品に片手を振って断るつもりしまし

た。でもそうしませんでした。とんでもない。今このときをのがすなんて。ミス・ペティグルーはあやうく言葉を飲み込みました。今日はなにが起こったって、みんな受けられるつもりなのです。ひょうたんからこまのように降ってきた今日この日、差し出されたものはなんでも味わうつもりなのです。

「そうですね」とミス・ペティグルーは落ち着いて、なれた調子で余裕たっぷりに言いました。「ドライ・シェリーを少し頂こうかしら」

「ドライ」が決め手です。シェリーじゃだめ。シェリーなんて当たり前前すぎます。「ドライ・シェリー」。それこそが品、洗練、そして味へのこだわりをほめかし、ミス・ペティグルーの格をあげてくれるのです。ドライというのが何を意味するのかわさっぱり知りませんが、前の前の勤め先のご主人が「ドライ・シェリーなんてくそ食らえ」といつていたのをよく覚えていました。そのご主人というのがたいへんなかんしゃくもちでミス・ペティグルーはいつも震え上がっていたものです。そのご主人が嫌いなものならきつと自分が気に入るものに違いありません。

ニックは別に感心したふうでもありませんでした。

「ホースイズ・フィリップのほうがうまいぜ?」

ミス・ペティグルーのなんでも試してみろという決心がほんの少し揺らぎました。

「やめておきますわ」と急いで言いました。「まだお昼前ですもの。ドライ・シェリーをちょっとだけ、お願いしますわ」

ニックはキッチンに入っていきました。ミス・ラフォースが身を乗り出しました。ニックの態度に責任を感じていたのです。この新しくお友達になったレディにあんな口をきくなんて。

「ニックの口のきき方、気にしないでね」とささやきます。「悪気があるわけじゃないのよ。あたしたちが『やあね』とか『ふん』とか言つのと同じことよ」

ミス・ペティグルーは頭を上げました。断固とした顔です。

「ねえあなた、うるさいこと申し上げたいわけじゃないんですけど、でも、その言い訳は通りませんわ。あたたくしはうんと年上ですから、これまでずいぶんいるんな人たちが『悪気なんてない』って言つのを聞いたことがあります。でもほんととちゃんと悪気はあるし、本人たちだって悪気があることをよく承知してるんですよ。よくない習慣にしようのない言い訳をくつつけています。もしあたたくしがあなただったら、自分の魅力をつかってあの若い方に……口のきき方をいくら直すようにさせますわ。なんとっても若い男性というのは、ちゃんと礼儀正しく扱ってほしいという女性を大事にするものなんですよ。あの……こんなこと言ってお気になさらないでくださいましねでも、申しあげたとおり、あたたくし、あなたのお母様ほどの年齢なんですから」

ミス・ラフォースの瞳がことさら楽しそうにきらめきました。でも、彼女はその優しくなつたいい表情をそっと押し隠しました。絶対、この人をがっかりさせたくないわ。

「やってみるわ」と大人しく答えます。「努力する。あなたの言つたとおりに決まってる

もの」

キッチンでグラスが触れ合い、ニックが動き回っているのが聞こえてきます。低く楽しい流行の曲を口ずさんでいます。と、急にハミングがやんだかと思うと、ぞつとするような沈黙が流れました。ミス・ペティグルーはミス・ラフォースの顔を見ました。ミス・ラフォースもミス・ペティグルーの顔を見ました。ミス・ラフォースの顔が急にひきつり、はじめて会ったときのように不安に凍りつきました。

キッチンのドアが開き、ニックが入り口に立っています。ミス・ペティグルーの背筋を冷たいものが走りました。朗らかで感じのよいニックはどこかに消えてしまいました。恐ろしい顔でにらんでいます。とたんにミス・ペティグルーは悟りました。これは冗談ではありません。本当に怖い男というのは存在するのです。今までびっくりするようなことがいろいろ起きていますが、これはみんな何かの素敵なジョークで、自分はたまたまそのおすそ分けにあずかっている。なんとなくそんなふうには思いはじめていました。でも、そんな気分は吹き飛びました。今や、もうユーモアの通用しない、新たな事態の真つ只中にいるのです。

ニックにらみつけられて、ミス・ラフォースの可愛らしい顔が、怯えのあまりほとんど緑色になってしまいました。

「いつから」とニックは低い、ぞつとするような声で言いました。「両切り葉巻を吸うようになった？」

ミス・ペティグルーは一瞬、吹きだしそうになりました。ミス・ラフォースもすくみあがってはいたものの、この場にそぐわない笑いの発作におそわれているのがわかります。さつきミス・ラフォースが言ったことが耳に響きました。「それで、探偵がうるうる突つきまわって言うの、『ほつ！ それじゃお嬢さん、あなたは葉巻をお吸いなんですか』」

ミス・ラフォースは口をきくどころではありません。ミス・ペティグルーはすべてが自分の肩にかかっていることが分かりました。

頭がくらくなりましたが、突然、ロケットが発射されたごとく、目の前がぱつと明るくなりました。前のご主人だったミセス・ブラムガンのことを思い出しました。丘のような胸、馬のような鼻、やつとこのような口、まさかみみたいな顎、ギーギーというやりみたいな声、陸軍の將軍だつて震え上がる威張りくさつた態度。ミセス・ブラムガンのところにいた二年間は、まさにまぎれもない地獄そのものでした。が、それが役に立つときがきたのです。すべてを決めるのはどう振舞うかです。態度ひとつでものことというのはうまくいくものです。ミセス・ブラムガンのやり方を一番よく知っているのはこのあたくしじゃないの？ ミセス・ブラムガンの言うことを疑おうなんて勇氣のある人は誰一人いませんでした。今こそミセス・ブラムガンの出番です。

ミス・ペティグルーは立ち上がりました。大股で部屋を横切ります。ふんぞりかえつ

て人を小ばかにするような足取りです。椅子に乗っているハンドバッグを取り上げました。向き直ると、ニックをちらりと見ました。顎を上げ、目を吊り上げ、声はぎーぎーとしゃがれています。

「言っておくけど」とミス・ペティグルーは言いました。「あたくしがなにより嫌なのは女々しい男なの。家の中を突っつきまわしたりして、おせっかいな年寄りじゃあるまいし。あたくしはミス・ラフォースのお客ですよ。ミス・ラフォースがいっつておっしゃるなら、あなたがどうこういうことじゃないでしょう。あたくしはね、両切り葉巻を吸いたいと思っただけ、くそ紙巻なんかじゃなく両切りのやつを吸うのよ。好きなことをしていい年になっただから、好きなようにさせてもらっわ。あなたの意見なんて犬に食わせる、よ。ほら一本おとりなさい。なかなかいけるんだから」

ミス・ペティグルーはハンドバッグを開け、よれよれになった葉巻の包みを取り出すと差し出しました。緊張が走ります。ミス・ペティグルーはふん、と鼻を鳴らしニックをにらみました。

ニックはすっかり気を飲まれています。手を伸ばすと、包みを受けとり、葉巻を見比べます。そして半分になった吸いさしを敷物の上に落とすと、踵で踏みつぶしました。ミス・ラフォースに歩み寄ると、目の前に覆いかぶさるように立ち、ミス・ペティグルーがぞつと震えるような優しい声で言いました。

「俺をだましたりしないだろうな？」

ミス・ラフォースはあつという間に元どおりに立ち直りました。伊達に女優をやっているわけではありません。ぴょんと立ち上がると、すねたふりをしてみせます。

「もういやね、ニックだったら！ いつになったら大騒ぎをやめるの？ ここに男の人なんて入れないって言ったでしょ。これで満足？ お酒はどこ？ あたしが取りにいかないやだめ？」

「悪かった」

彼はいきなりミス・ラフォースに片腕を回すと、キスをしました。ミス・ペティグルーはあわてて寝室に避難します。

「やれやれ！」ため息をつきました。「お熱い二人だけにしておきましょう。それにしてもキスってずいぶん何回もするものなのね」

ミセス・ブラムガンになった後の反動で震えがきて、今にも倒れこみそうな気がしましたが、倒れているわけにはいきません。最後までミセス・ブラムガンをやりとげなければならぬのです。考えてみれば、ニックがかつとなつて、怒りにまかせて出て行ってくれるのが一番ありがたいのに、興奮でのぼせたあまり、そのことをすっかり忘れていました。ニックはミス・ペティグルーを震え上がらせ、ミス・ラフォースのことを震え上がらせました。二度とそんなことをさせてはなりません。鏡にうつった自分に怯えた目をちらりと向けたあと、ミス・ペティグルーは居間に入っていました。

ニックがお盆の上にお酒を載せて持ってきました。ミス・ラフォースは心ゆくまで素

敵なキスを楽しんだ女性ならではの輝くばかりの晴れやかな表情を浮かべています。その顔がミス・ペティグールの心をとらえました。この人はなんて無防備に見えるのかしら。そうでした、すっかり忘れていました。「ニックはまたこの人を捕まえてしまったわ」とミス・ペティグールは考えました。「でもそうはさせませんよ。あたくしはミス・ラフォースを救わなくちゃいけないんだから」

ニックがお酒を持ってきました。ミス・ペティグールは一言も言わず、酒豪よろしくぐつと飲み干しました。そのおかげで頭の働きがどうにかなくなってしまっなんて考えもしないです。

「まあ」とミス・ペティグールは言いました。「とってもおいしいこと。もう一杯いただけるかしら」

ミス・ラフォースとニックはまだ一杯目をすすっていました。ニックは感心したようにミス・ペティグールのほうを見やりました。なかなかやるじゃないか。このばあさんは肝がすわってる。葉巻を吸い、きついシエリーを一気飲みときたもんだ。

「ウイスキーのほうがいいんじゃないか？」と熱心にすすめます。「たしか戸棚に少しあつたはずだ」

「いいえ、結構よ」とミス・ペティグールは言い放ちました。「朝は軽いお酒のほうがよろしいの」

その声はたつぷりと酒に浸った夜更けの酔っ払いのものでした。

(あらいやだ！)とミス・ペティグールは焦りました。(あたくしがこんなふうなしゃべり方をするなんて。どうしちゃったのかしら？ いったい何がどうしたの？)

とはいっても、本当に気にしていたわけではありませんでした。とにかくそれほどに。そう思ったのは、これまでの価値観へのつしるめたさと、「こまかしてみたいなものです。冒険のわくわく感がミス・ペティグールをすっかり飲み込んでいました。そう、それにちよっぴりワインもきいて、いまや何が起きててもへいちゃらです。

ニックがお代わりをもってきました。

「やかましいおばさんみたいにしなれば、あなたもなかなか悪くないわね」とミス・ペティグールは言いました。

「それはどうも」とニックはにやりとしました。「あなたはレディだ」そして二人は乾杯しました。

こんなふうに少しばかり仲良くしたからって、ミス・ラフォースをニックの魔の手からひきはなすというミス・ペティグールの決心は少しもゆるぎませんでした。これは休戦中のちよつとした敬意の交換でしかないのです。

三人は酒を飲み干しました。ニックが立ち上がりります。

「ダルトンに会いに行く。仕事だ。じゃなきゃ昼飯に誘うんだが。あいつが半分、金を出すからな。いっしょに新しい店を出すんだから機嫌をとっておかなきゃならん。じゃ、今晚会おう」

「まあ！」とミス・ラフォースが声をあげました。しょんぼりとしています。「いつ？」
「君の順番が終わったらいっしょに帰ってこよう」

ミス・ラフォースの片手が椅子の肘掛にのっけていました。ニックは身を乗り出すとその手首を握り、立ったままじっと見つめます。ミス・ラフォースが視線をあげ、二人は黙って見つめあいました。

ミス・ペティグルーはくらくらと気が遠くなるような気がしました。そして不思議な感覚をおぼえました。痛みにも似た感じが胃の真ん中を走ったのです。まさにミス・ラフォースが言ったとおりでした。でもニックが見つめているのはミス・ペティグルーではありません。だれもミス・ペティグルーをあんふうに見たことはありませんでした。それでも、今、ミス・ラフォースがどんなふうに感じているか手に取るように分かります。息がとまりそう、恐ろしくて、でもうっとりとした気分。すべての感覚がゆっくりとしたろけ、震えながらすべてを明け渡ししてしまいます。それに、ニックの表情を見れば、なんでも言うことをきかなくなってしまうのです。ニックがどっぴう男か分かっているはずのミス・ペティグルーでさえ、ぐらっとなりました。外からは罪のない、地上の天国をはじめのぞいた恋人たちに見えるでしょう。でも、ミス・ペティグルーのように内側から見れば、ニックは麗しの貴婦人を破滅に導こうとしている邪悪な男なのです。

とはいっても、現実的な分別の力を動員しないことには、ニックが悪者で、身勝手、来年の今ごろは他の女を同じ強引な熱っぽい目で見つめていて、かわいそうなミス・ラフォースは恋にやぶれて胸のつぶれる思いをしているかもしれない、などということも頭から飛んでいってしまいそうです。でも、ミス・ペティグルーは何があってもココイノのことは忘れませんでしたし、無知なお馬鹿さんでもありませんでした。

恍惚とした表情と、そこに漂う、もつとつなつてもいいわという空気に、ミス・ラフォースの決心がぐらつきかけているのが分かります。実はもつぐらつてしまっているのですが、降参を決定してしまふ致命的な一言がミス・ラフォースの口から出る前に、ミス・ペティグルーは大砲のように行動を開始しました。

ブラムガン夫人の足取りで部屋をのしのと横切ります。シェリーの瓶とグラスはお盆の上に乗っていました。もう一杯ばしゃばしゃと注ぐと、無神経にグラスをとりあげました。長年の耐え忍ぶ毎日から、無神経なしぐさには雰囲気台無しにする効果があることを知り抜いていたからです。

「そのあなた」とミス・ペティグルーは喉からしぼりだせる一番、しゃがれた声を出しました。「言うておきますけどね、一杯やりに来たければ来てもいいけれど、あまり遅い時間は駄目よ。あたくしももつ若くないし、ニコにはちょっとしかいないんだから、夜に邪魔されて翌日、半病人みたいになるのはごめんなの。あたくしはミス・ラフォースといっしょに休むのよ。だからあたくしがいる間はミス・ラフォースも早寝をします。あなたがずつとつろつろしてちゃ困るのよ。あたくしはミス・ラフォースにおつ

ました。

(今、ミス・ラフォーアスが折れてしまったら)とミス・ペティグルーは思いました。(負けだわ。もうどうにもしてあげられない。もしニックが黙ったまま出て行ったら、あとを追いかけてしまっくんじやないかしら)

そのときニックが口を開きました。

「電報を打っておくんだっとな」

ミス・ペティグルーは深いため息をつきました。ミス・ラフォーアスは不安げに両手を握り合わせています。おずおずとしたこびるような笑顔を浮かべました。

「あの……本当にごめんなさいね」

「じゃ、明日な」

「ええ、明日」とミス・ラフォーアはいそいそと約束しました。

「たぶんね」とミス・ペティグルーはつつけんどんに言いました。

「昼飯を食おう」

「ランチね」とミス・ラフォーアスが請合いました。

ニックはこちらに來ると、ミス・ラフォーアスの両肘の上をもってひきよせました。

「まあ、君はどこへも行かないしな」

ニックの若々しい顔に、いかにも老練なたたかさがのぞき、ミス・ペティグルーはちよつと背筋が寒くなりました。彼はミス・ラフォーアスの顎を持つと、顔をあお向けさせました。

「ちよつと待ったってお楽しみは減らないさ」

そしてキスしました。ニックの後ろでドアがバタンと閉まりました。